

30 「善人なおもて往生す」

こげ臭い！ 深夜の廊下に煙が流れています。寮母が部屋に飛び込む。Aさんが懸命に消している。寮母はすっかり動転、がたがたふるえながら血相変えて激しく詰問。勢いにおされて、さすがの豪傑もおろおろ、しかし、必死の弁解です。

——錢（ぜに）盗んだのはたしかにわしじゃ。となりん奴から警察に言われ
たら、家ん者も調べられち、えらい迷惑をかけるき、孫にやった書きつけを焼
きゃ、あん子に迷惑かけんじすむきな……。頼むき、警察に言わんじくれな
あ。もう全くせんきな。年をとっち、ぼうじたん（ぼけた）じゃ……。お前たち
が、わしんこと気をつけくれなあ。ふがよかった。急いじ消しち……。着物や
ら焼けんじよかったあ……。これからは、こげんことが起こらんうちに怒ってく
れなあ……。ひたすら懇願する姿は今までになかったことです。「わしんように
悪い病気持ちちは早う死なにゃ。皆に迷惑かけるきなあ」。涙が光っています。

たくさんの焼死者を出した東京の特養ホームの大火以来、火には皆が真剣で
す。だから、ホームでの最悪事は弄火、失火です。ベッドが焦げている。証拠
歴然。Aさんの数日以内の強制退所はもう決定的です。

Aさんのこれまでの七年間は、すべてのトラブルの主人公であり、盗癖、女
性の部屋への忍び込み、いわゆる問題老人の最たる人です。だから、これでや
っと重荷を降ろせるといふ空気がホームに流れています。

しかし、意外にもその寮母たちの申し出は、「もう一度私たちに A さんのお世話をさせて下さい。一番苦しんでいるのは A さんです」。

観念し切って、ふとんの中で空を眺めて暮らす A さんを見かねて、寮母は肩をそっと押さえ、「お孫さんがお嫁に行くまで長生きしないとね」と慰める。

「いんね、早う死にたい」。寂しそうです。

園では週一回の職員福祉講座の、そのころのテキストは『歎異抄』で、「善人なおもて往生す、いかにいわんや悪人をや」の節が数週間も続いています。そのためか、A さんを見る寮母の目が変わり出していたのです。

月一回行われる高齢者のための園大学では、利用者も順番に「わが人生」を発表します。これまで頑として聞き入れなかった A さんが、今度は、ぼつりぼつり語ります。

——温泉にも行った。耳が遠いんでホームではだれとも話さんが、旅では寮母さんがつききりで大きい声で説明してくれて、よう分かった。はじめての泊旅行で、ふろもいい湯じゃった。家に帰ると息子が、やさしゅうしてくれる

ようになった。わしはむかし、悪いことをして、すまんと思うちよる。みんなこらえておくれ——。

あまりの変貌。寮母側がほんの少し変わることで、Aさんの大きな変化。何を自分のものにしていくか、それが教育です。なるべき自分への道を新たに歩み出す——Aさんの見事な生涯教育に私たちは、目を見張られました。

入所早々から毎日がトラブルの主人公でした。けんかをしては「こんな所にはおられん」と言ってタクシーを自分で呼び、家に向かう。が、三時間もしないうちに戻り「家の若い者が県に申し上げに行った。お前ら、おじいめにあうぞ」と肩をいからず。

実はAさんは家に帰れないんです。ここには書けそうもないトラブルを家でも起こしています。だから「どのつらさげて帰るのか」と家人は冷淡です。

幸いにも、火付け事件はAさんの新生の絶好の機会となりました。廊下に響くどなり声もやみ、「息子はようやる。わしが悪かった」。家族への思いやりも出てきました。ようやくAさんの上には平安な日々が流れます。

それから一年たとうとするころ、昼食は全部食べましたが、午後三時、心臓発作、そのまま静かな昇天でした。長い八年が終わったのです。

大往生はいわゆる僧正さんたちにのみあるとは限らず、凡人にも同じくあることを教えるAさんの晩年でした。
